慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ランボーに於ける「新しい肉体」の創造
Sub Title	The creation of "nouveau corps" in Rimbaud
Author	山口, 佳己(Yamaguchi, Yoshimi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1977
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.36, (1977. 3) ,p.256(57)- 273(40)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	森武之助教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00360001-0273

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ランボーに於ける「新しい肉体」の創造

——Arrière... ces anciens corps, ... ——Rimbaud

山口佳己

Que parlais-je de main amie! Un bel avantage, c'est que je puis rire des vieilles amours mensongères, et frapper de honte ces couples menteurs,—j'ai vu l'enfer des femmes là-bas;—et il me sera loisible de posséder la vérité dans une âme et un corps.(1)

『地獄の季節』Une Saison en Enfer の最終章「告別」の，最後のパラグラフに於いて，「真理の所有」を言々し，その書を締めくくる直前に，なぜランボー Arthur Rimbaud は，いかにも振り向きざまに，「偽わりの骨董恋愛」vieilles amours mensongères を嘲笑い，「女どもで出来た地獄」l'enfer des femmes をあわただしく引き合いに出し，激しい嘲罵と蔑みの言葉を浴びせかけねばならなかったのか？「恋愛」や「女ども」のことなら，とりわけそれらを言葉の限りを尽してこきおろすことに関してならば，すでに久しい以前に決着がついていたのではなかったのか？

ところが，初期詩篇に於いてのみならず，最大の精神的危機に出会ったあとの，この『地獄の季節』と題された，自己と世界の容認へ向けての根底からの総括の書の結末に至ってさえも，「女ども」に対する悪罵や見切りの言葉に，まだ勢いの衰えがいっこうに見えてはこない。

これはいったい，どうしたことなのか。

「女ども」と「真理」との，この一見して奇妙な対比——これは，しかしながら，ランボーの「見者」Voyant の試みの根本的な一性格を明らかにしていよう。つまりこの対比は，『地獄の季節』が書かれるほぼ二年前，すなわち一八七一年五月十三日に，彼の高等中学の修辞学教師ジョルジュ

・イザンバール George Izambard にあてた通称「見者の手紙」Lettre du voyant I に於いて，彼が打ちたてた詩的思想の基本原理と，深いところで繋がっているものと考えられる。そしてその基本原理なるものは，「人が我れを思う」On me pense（この On は，此処ではあくまでも便宜的に「人」と訳したまでである）という，主格の座から「我れ」Je を追い落したところの，——換言すれば，古典主義的・合理主義的枠組内の「思う主体」sujet pensant としての狭小な Je に取って代えて，仏語の通常の用法から見て如何にも破格な「思う主体」から「思われる客体 objet pensé と化した主体 sujet pensé」へのランボー的転回(！)を経ることにより，恒常的な主語 On を「思う客体」objet pensant として殆んどその正体が不明のままに丸ごと実体化して，主格の座に強引に居直らせたところの，——いわばひとつの反・コギト的定立に，集約的に表現されている。

そこで，この定立と，当の問題点たる「対比」との隠微な関連を捉えるためにも，まず以て当の定立そのものの意味内容を，今一歩立ち入って探って置こう。

> Il s'agit d'arriver à l'inconnu par le dérèglement de *tous les sens.* Les souffrances sont énormes, mais il faut être fort, être né poëte, et je me suis reconnu poëte. Ce n'est pas du tout ma faute. C'est faux de dire : Je pense. On devrait dire : On me pense. Pardon du jeu de mots.
>
> JE est un autre. Tant pis pour le bois qui se trouve violon, et nargue aux inconscients, qui ergotent sur ce qu'ils ignorent tout à fait[(2)] !

上の文面では，その二日後に友人ドゥメニー Paul Demeny にあてた書簡に比して，彼は己がその時体験した，根源的な詩的覚醒の内実を，充分言い表わし得ないでいる。彼は覚醒そのものに，おそらく殆んど圧倒されていたと言える。

しかしながら，このやや舌足らずな述懐の裡にも，爾後の彼の詩法を決定づける基本原理は，きちんと抑えられてはいる。だがそれにしても，「人が我れを思う」というこの定立は，いったい何を意味するのか。ランボーが，「地口」jeu de mots と自称するこのくだりは，他に「**我れ**とは一個の他者なのです」Je est un autre. という言葉とともに，数多の論議を呼び起こしてきた。しかし，昨年ジュネーヴで出版されたジェラルド・シェーファー Gérald Schaeffer の『見者の手紙』[3] Lettres du voyant の「註解」を繙いても解るとおり，かつてはもとより当今でも，その解明は依然として紛糾している[4]。

それでは，過去から現今にまで至る諸説の批判的点検に発したところの，シエーファーの「註解」の試みは如何なものか。彼によれば，当の「地口」は「いずれにしても何ごとをも弁明しない。」なぜなら，「『ぼくの落度』という言葉は，事の善し悪し moral に関わる意味で用いられているのではなく，免責性 irresponsabilité を単に意味するだけ[5]」だからだ。

なるほど，シエーファーの指摘のとおり，ランボーは「人が我れを思う」という言葉をとおして，「生まれながらの詩人」としての己の出自や現存の秘密が，自らの意志や意識性を超えたところに存することを告白していよう。まさに彼は，「己がいつの間にかヴァイオリンとなっていることに気づく木片」le bois qui se trouve violon. と同じように，そのことに就いての定かな対象的意識を持ちえないでいるのであり，敢えて「責任」を言々するならば，それに対する「責任」を持とうとしてもおそらく持ち得はしないのだ。それは殆んど，彼に於いては，宿命とも自然とも称してよい程の外的要因に発するものであり，「自分たちがまったく知りもしないことに就いて詭弁を弄する（ergotent — この動詞も，デカルトの Cogito ergo sum の ergo に対する揶揄か）無意識的な人びと」とは異なって，常に「意識的」であることを標榜する詩人の意志やその意識性の向う側から，一方的に関与してくる或る「何か」なのであろう。

だがそれにしても，最新の精密な研究の成果でもあるシエーファーの

「免責性」の観念だけでは，詩人の「地口」は，遺憾なことには，矢張り充全には捉え切れない。なぜなら，詩人は，一方的に向う側から彼に焦点を合わせ，彼に関与してくるその「何か」との関係を，「免責性」のみならず，いわば更には不透明の関係性，あるいは関係の不透明性の相のもとに捉えているからだ。そして，その関係の不透明性，その関係の一方的な性質そのものに，彼は激しく苛立っている。というのも，その関係に於ける「生来の詩人性」être né poëte には，彼にとってはさしたる価値も存し得ぬため，その肉体と感覚の大規模な「合理的」濫用に訴えて常に「人(On)」をして「我れ」を「思わしめる」（ドゥメニー宛の書簡に見られる Il faut être voyant, se faire voyant の使役の動詞 faire の持つポジティフで強行的な意味に留意しよう）ような魁偉な受容器或いは共鳴装置に己自身を化することにより，あらゆるものとの関係を即刻即時透明化することをとおして究極の不透明体であるかも知れぬ「未知なるもの」l'inconnu への到達を彼は願っているからであり，そもそも「見者」の試みそれ自体が，詩作行為に附纏う，或る本質的な待機状態を，おそろしく積極化した試みであるからなのだ。

だが，「人が我れを思う」の，この「人 (On)」とは，ランボーにとっては，何者なのか。かつてのルネヴィル Rolland de Reneville やジャング－ Jacques Gengoux たちの，印度哲学や秘教学 Occultisme にその解釈の拠点を求めた論はさて措き，シェーファーは，この「人 (On)」に就き，「詩人の詩的思想を開花させ，その作品の一部が普遍的叡智に由来することを殊更に意識している，主観的で客観的な創造精神の二重性を示現する神秘的な作動主だ」[(6)]と言う。たしかに，創造の時間と場所は，「神秘的」で「不可思議」であるかも知れぬ。しかしランボーは，「人が我れを思う」という，実際には地口ならざる「地口」（この十三日附の書簡を通読すれば，その全体がシニカルな調子で貫かれていることが即座に判明しよう。詩人は己の定立がイザンバールの理解を超えているのを心得ていたため，Pardon du jeu de mots と言ったにすぎない）によって，創造過程の不可解で非合理的な特質を，このうえもなく合理的・現実的に表明し

たのだ。ヘンリー・ミラー Henry Miller も語ったように，ランボーほど現実にデーモンの如く附纏った人物はいない。詩人が語る「未知なるもの」さえ，ガスカール Pierre Gascar の言葉を借りれば，現実的なものに「こびりついて (coller)[7]」いる。事これに関するかぎり，この種のシエーファーの解釈は，ルネヴィルやジャングーたちの神秘主義的解釈から，さほど遠くは離れてはいない。そのうえ彼は，ランボーの「地口」に就いて，思わず「奇妙な」curieuse という形容詞を附してはいるが，創造の把捉し難い時空に関して，この「地口」ほどの現実的で合理的な説明は，他に数多く見当りはしないであろう。

ではこの「人 (On)」とは，何者なのか。この「人 (On)」は，ランボーの作品中では，顕在的にも潜勢的にも，様々な形姿をとって立ち現われる。それは，例えば，ボヌフォワ Yves Bonnefoy の指摘した「媒介者的な人」On médiumnique[8]，リシャール J. P. Richard が言及した『イリュミナシオン』Les Illuminations の「町々」Villes の「建設者」たる「人 (On)[9]」，「花に就いて人が詩人に語れること」Ce qu'on dit au poëte à propos de fleurs に登場する怪物的な「人 (On)」，あるいは，「幼年時代」Enfance の「飢えて渇いている時に，あなたを追いたてる何者か (quelqu'un)」，「大洪水のあと」Après le déluge の「彼女だけが知っていて，俺達が知らないでいる話」を秘匿している「魔女」Sorcière，その他「精霊」Génie や幾つかの両性具有者のイマージュ等々に，ひとまず重なりあう類のものだ。

だが，この「人 (On)」とは，更にいったい何者なのか。もっとも基本的な作業に戻って，これをひとつの語として捉えなおせば，そもそもこの語は，仏語に於いては，この語が使われるその時と場所に応じて，「我れ」でもあれば，「汝」でもあり，「彼」，「彼女」でもあれば，それらすべての複数でもありうる，如何にも茫漠とした捉えどころのない不定代名詞ではないか。そして，語の多義性を極限にまで増殖することを願った詩人が，一人称・二人称・三人称・男・女・単数・複数の一大綜合でもあり得るようなこの語の価値を，己の「思想の開花期」に臨んでいながら手を拱いて

見過ごす筈は，絶対にない[10]。彼はその時，この語に於いて自己の詩的覚醒の全体的な表現の場を見出し，殆んど宇宙的な，名状し難い共同感覚を体験したに相違ないのだ。この語に於いて，「人 (On)」と「我れ」とを隔在させる障壁は除去されるため，そこに目まぐるしく豊饒な，主体と客体との立地交換，相互循環が開始される。そこでは，主体が客体化されると同時に，客体が主体化されるがゆえに[11]，「**我れ**とは一個の他者なのです」という言葉が，当の「地口」言々のその直後に書きしるされる論理的必然性 (On me pense, donc JE est un autre) が準備されており，この主体と客体との無限の転化・綜合の過程に於いて，いわばサルトル的な他者の視線の地獄性の如きものが乗り超えられるような，ひとつの魁偉で湧き立つような非制度的・無政府的瞬間の到来が準備されるのだ。

さらにまた，この「人が我れを思う」という地口にあらざる「地口」は，ランボーと彼の無意識との最初の出会いを刻印している。この「人 (On)」とは，詩人が「楽弓を一ひき弾ずると，交響曲が深渕の中で鳴りはじめ，或いは舞台の上に躍り出てくる」Je lance un coup d'archet : la symphonie fait son remuement dans les profondeurs, ou vient d'un bond sur la scène[12] と語ったように，これは詩人の意識性の向う側から，つまりその下層から詩人の意識に圧倒的に潜入してくる個人的・集合的な無意識の巨大な全体であり，これはまた『イリュミナシオン』Les Illuminations に犇めいているランボー的共同体の潜勢的で両性的な大群衆の映像にも重なるものだ。そして「見者」の試みは，かかる「全体」との関係を，濫用の対象としてのその肉体と感覚の諸能力の暴力的な拡大をとおして透明化することにかかっていたのは勿論のこと，時には自己以外の存在に具わった感覚や意識の併合をとおしてまで，そのことの実現が夢見られていた程なのだ。その点，『地獄の季節』の「悪い血統」Mauvais sang のなかの，次の一文は示唆的である。

Encore tout enfant, j'admirais le forçat intraitable sur qui se referme toujours le bagne ; .....je voyais *avec son idée* le ciel bleu

et le travail fleuri de la campagne.[13]

上の「手のつけられない徒刑囚」forçat intraitable に就いては，さまざまな註釈が附されているが，一八七〇年の四月頃に，高等中学修辞学教師イザンバールの出題による『絞首刑を宣告されたヴィヨンの赦免を願ってシャルル・ドルレアンよりルイ十一世に宛てた手紙』という作文をランボーが書いていることと照らし合わせて，この「徒刑囚」とは，むしろヴィヨン François Villon と取る方が，収まりがいい。だが，今それは兎も角，詩人は「徒刑囚の考え」avec son idée を，すなわち「他者」の意識をとおすことにより，彼を取り巻く世界の姿を見ようとしており，終始薄暗い牢獄に閉じ込められる徒刑囚の視線にとっての外界の新鮮さ，真新らしさを，此処では描き出そうとしたのであろう。そしてこの種のランボーの「他者の考え」に立とうとする志向性は，例えば「ボトム」Bottom と題された散文詩篇に於いても端的に表わされており，そこでは更に「青灰色の大きな鳥」gros oiseau gris bleu や「紫色の歯茎をした太った牡熊」un gros ours aux gencives violettes や「驢馬」âne などの鳥獣類への変身 métamorphose に訴えてまで，「奥方」Madame というひとつの未知なる対象への肉迫を，詩人は意図しているのである。「見者の手紙」でランボーが語ったように，そもそも詩人は「人類や，動物にまで責任を負う」chargé de l'humanité, des animaux même のであるから，人類との共同性は勿論のこと，かかる動物との共同性のイマージュは，ランボーの作品集の至る処に出現しよう。そしてこれらの共同性は，十九世紀の詩人に於いて，とりわけヴィクトル・ユゴー Victor Hugo などに顕著に見られる「存在するものの大いなる絆」Great Chain of Being[14] への探究心のランボーへの影響もあってのことか，下等な生物の段階から至高の精神的存在の段階までを網羅的に定着させた十四行詩「母音」Voyelles に於いても，ひとつの高度な表現に結晶化される。しかも，これらのオルフェウス的共同性に通底するのは，たとえ形而上的なものであろうとなかろうと，ひとつの癒やし難い，飽くなき「渇き」soif なのだ。

Les pigeons qui tremblent dans la prairie,
Le gibier, qui court et qui voit la nuit,
Les bêtes des eaux, la bête asservie,
Les derniers papillons!.....*ont soif aussi.*[15]

しかしながら，人類や鳥獣魚昆虫類等の生き物らとの，かかる共同性に於いて，矢張り最も親近で枢要な位置を占めるのが，女性であった。

Ces poètes seront! Quand sera brisé l'infini servage de la femme, quand elle vivra pour elle et par elle, l'homme,—jusqu'ici abominable,—lui ayant donné son renvoi, elle sera poète, elle aussi! La femme trouvera de l'inconnu! Ses mondes d'idées differeront-ils des nôtres?—Elle trouvera des choses étranges, insondables, repoussantes, délicieuses; nous les prendrons, nous les comprendrons.[16]

上掲の一文は，先に掲げた修辞学教師イザンバール宛の，最初の詩的覚醒による基本原理の発見を開陳した書簡の二日後（五月十五日）に，友人ポール・ドゥメニー Paul Demeny に書き送られた書簡の一部だ。この書簡では，詩的思想の覚醒による興奮が幾許かは抑制されて，二日以前のそれと較べて，「見者」の理論がより冷静に，より組織的に展開されている。そしてその一環に上掲のごとく，「未知なるもの」，「見慣れぬもの」，「測り難いもの」，「厭はしいもの」，「甘美なもの」等を見出すための恰好の「連れ合い」couple として，男性のそれとは異なる「観念の世界」mondes d'idées を持つかも知れぬ女性に寄せるランボーの多大の期待が述べられている。そして，ここにこそ，この小論の冒頭でわれわれが触れたような，「女ども」と「真理」との，一見して奇妙な対比の要因が潜んでいたものと考えられるのだ。

しかしながら，これまた拙論の冒頭で触れたように，初期作品から後期

諸作品に至るまで，女性に対する不信の念や悪罵の件では，ランボーは大凡のところ一貫している。したがって，「見者の手紙」のかくなる類の女性観は，ランボーの詩的全営為の文脈に照らし合わせて，いかにも奇異な印象を人々に与えもしよう。そのうえ，このドゥメニー宛の，女性詩人の出現を待望した当の書簡に，初期詩篇中では「泡のなかから生まれたヴィーナス」Venus anadyomène などと相並んで，詩人の悪罵の修辞の才を総力を挙げて傾注したかの観を呈する「わが小さな恋人たち」Mes petites amoureuses が収められていて，その印象をより一層強めもしよう。確かに，ランボーが，女性に関して判然と肯定的な考えを抱いたのは，他に「ジャンヌ・マリーの手」Les mains de Jeanne-Marie などを除いては，この時だけであるかも知れぬ。しかも，未来時制をとおしての，女性の「見者」voyante の出現の待望論で。そして，これ以前は憎悪，これ以後も憎悪。なるほど，ボヌフォワも指摘したように，ボードレール以上に，ランボーと女性との乖離は絶対的であった。(17)

それでは，一種のエア・ポケットに陥ったかの感をわれわれに一瞬与える「見者の手紙」のこの女性観は，いったい何に由来しており，またどのように解すればよいのであろうか。まず，その由来に関して言えば，この女性観は，ジャングー Jacques Gengoux の指摘に依れば，エリファス・レヴィ Eliphas Lévi の『魔術の歴史』Histoire de la Magie の読書体験に発するようだ。(18) ジャングーに依れば，この女性観は勿論のこと，それ以後のランボーの主要な作品に就いては，すべてレヴィにその渕源を求め得るのだが，マニー Claude-Edmond Magny も批判しているように，(19) ランボーはレヴィにその詩的思想を全面的に依存させたわけではあるまい。しかし，レヴィにとって，女性というものが人間存在の柔和で，受動的で，情感に満ちた局面を提示する限りに於いて貴重な存在であるということ，或いはまた，女性が受動的状態から能動的状態に仮りに移行した際に，彼女が二重の否定によって肯定の段階に至り，自らを不妊で魁偉な両性具有者として男女両性の範疇外に身を置く存在になるということ，そして更には，「言葉」が男性となったのであるが，その男性が自らを女性に

変貌せしめる時にのみ世界が救済されるということ，以上これらの諸点に関してジャングーがランボーの女性観，少くとも「見者の手紙」に於けるそれとレヴィとの類縁関係を指摘する時，マニーも述懐しているが，奇妙なことにも反論の余地は，あまり見当らないようだ。

しかしながら，この種の符合や類縁関係に即して言えば，プラトンの『饗宴』の両性具有者 Androgunos に始まって，中世以降の錬金術の体系に於ける，男性的原理と女性的原理より成る宇宙の秘密の精髄を，その器の内部に包蔵した「哲学の卵」を手中に収める双頭の怪異な両性具有者のイマージュの方が，ランボーの読書体験の範囲内に，より一層確実に収まるであろう。しかしこの際，出典をめぐる厳密な詮議は，さして重要でない。大切なことは，西欧歴史に底流する錬金術や秘教学や天啓派の異端思想が，キリスト教とは異なって，こぞって女性を重要視し，女性を自然の象徴とも見做し，その自然＝女性が人間を自然そのものの認識の道へ導き，人間の完成が両性具有であることなどを，ランボーに教えたことだ。そして，この観念は，現実の女性に対するランボーの根強い絶望とは裏腹に，これまた根強く存続しよう。したがって，『地獄の季節』の最後に於いても相も変らず獰猛に展開される女性の罵倒は，あたかも彼の「渇き」soif と「大洪水」déluge の関係にも似て，その観念と現実との絶対的な乖離に根ざす，絶対的な希求の叫びだ。

だが，それにしても，「見者の手紙」で抱懐した女性との共同性の観念の現実化を，ランボーはどのように思案したのか。「見者」の理論に則って，彼は「放蕩の限りを尽し」je m'encrapule le plus possible[20] ながら，「未知なるもの」への到達に急いでいるが，彼が待望したような女性の「見者」は一向に姿を現わさず，彼は完全な孤独のなかに置かれたままだ。彼はこの時期の，シャルルヴィル Charleville という「地方小都市の中でもとりわけ愚かしい」町のなかで，「平俗さと，悪意と，灰色の生活の中で，腐ってしまいそうな」己の心境を，後年次のように表わすだろう。

Je ne regrette pas ma vieille part de gaîté divine : l'air sobre de

cette aigre campagne alimante fort activement mon atroce scepticisme. Mais ce scepticisme ne peut désormais être mis en oeuvre, et que d'ailleurs je suis dévoué à un trouble nouveau,—j'attends de devenir un très méchant fou.[21]

ここでは，彼は，何の変哲もない田園の風景に取り巻かれたまま，さまざまな「懐疑」に責めさいなまれているのであるが，今や「新たな惑乱」に身を捧げているからには，「ひどく邪まな狂人」になってやろう，と言うことで，ドゥメニー宛の「見者の手紙」の「魂を怪物的にし」，「あらゆる形の恋愛や，苦悩や，狂気」によって，「至高の賢者」suprême savant になる意志を再確認しているようだ。しかし，彼がこの時期に，このうえもなく孤独であったことには変りはなく，現実の女性に対する断念の意志に発する女性への一種の変身の願望を，これまた後年の詩篇に於いて，次のように描きだすであろう。

Que j'ai réalisé tous vos souvenirs,—que je sois *celle* qui sais vous garotter,—je vous étoufferai.[22]

上の章句では，ランボーは，自らが女性であること，「あなた」というひとりの「他者」の意識内容たる「追憶」を，その「他者」の立場に則して「現実化」しうるような女性となることを願望している。そしてこの奇怪な願望の現実化の試みのひとつの方途が，たとえ達成不可能な幻想としてであれ，意外な方角から授けられるのだ。すなわち，ドゥメニー宛の「手紙」からほぼ三ケ月のち，一八七一年八月末か，九月の初め，ランボーは，パリ在住のヴェルレーヌ Paul Verlaine に，自己の幾篇かの詩作品と共に，彼の理想や憤激や倦怠などを細かく綴った書簡を送り，遂に九月中旬より，ヴェルレーヌの招きによって，両者の奇妙で熱狂的な祝祭めいた放浪と共同生活が開始される。そしてこの共同生活の一端に，性倒錯の関係が恐らく「方法的」に組み入れられるのだ。

この同性愛の関係は，既に妻帯者であるが，その方面への傾倒に恐らく従前より覚えのあったヴェルレーヌが，頭初ランボーに強要したものと見做し得よう。だがランボーは，どちらかといえばヴェルレーヌの無意識的な嗜好と異なり，その関係を逸早く意識化し，方法化したものと考えられる。なぜなら，「見者」の試みの，欠かし得ぬ課題のひとつとして，彼には「恋愛を再発明しなければならぬ」L'amour est à réinventer[20] 任務があったからである。そしてヴェルレーヌも，ランボーのこの風変りな使命感に影響されてのことか，彼らの同性愛の関係に，形而上的な価値を附与しようと努めるであろう。そしてこの点に関しては，チャドウィック Charles Chadwick もまた次の如くに指摘している。

> Verlaine et Rimbaud attribuaient à leur relations homosexuelles une valeur métaphysique et spirituelle, exactement comme, dans le monde occidental du moins, on voit de nos jours l'amour hétéro sexuel autre chose que la simple satisfaction d'un besoin physique.[24]

更にチャドウィックは，上の論旨を裏付けるものとして，ヴェルレーヌが，ランボーとの関係を，宗教的語彙を使用することによって (Quand diable commencerons-nous ce chemin de croix, hein? —Lettre du 2 avril 1872) 正当化・聖化する意志を持っていたことに言及しており，またこれに加えて，ヴェルレーヌの『愛の罪』Crimen amoris と照らし合わせて，ランボーの『地獄の季節』の「錯乱 I ——狂気の処女」Délires I —vierge folle などにも，彼らの間の同性愛を形而上化する意図が存したことを指摘している。[25]

しかし，「形而上化」の問題もさることながら，彼らの関係の背景には，結婚によって聖化されていない場合，それがたとえ異性間の情愛交換であろうとも肉体愛を認めないキリスト教社会が控えているため，ランボーとヴェルレーヌの関係を，それに対する社会的反抗として受け取ることも必要であろう。例えば，ガスカール Pierre Gascar なども，この関係

を社会からの「失踪」の方途として解しているが[26]，もしそうならば一八七一年十一月十四日の，コペー François Coppée の芝居の観劇の折に，ヴェルレーヌがランボー嬢の腕を取って歩いたという新聞記事 (Le Journal des Simond) に，別途の解釈の余地がなくなる。それゆえ，とりわけランボーの同性愛は，キリスト教ブルジョア社会やその倫理観への徹底した反抗としても，また，普遍愛への前提たる「恋愛の再発明」のための「思いつく限りのしかめ面」 toutes les grimaces imaginables[27] のひとつの現われとしても解し得るであろう。

そして，後年の次の詩篇は，ヴェルレーヌとの愛欲の関係を基礎として，創られたものと考えられよう。

Devant une neige un Etre de Beauté de haute taille. Des sifflements de mort et des cercles de musique sourde font monter, s'élargir et trembler comme un spectre ce corps adoré ; des blessures écarlates et noires éclatent dans les chairs superbes. Les couleurs propres de la vie se foncent, dansent, et se dégagent autour de la Vision, sur le chantier. Et les frissons s'élèvent et grondent, et la saveur forcenée de ces effets se chargeant avec les sifflements mortels et les rauques musiques que le monde, loin derrière nous, lance sur notre mère de beauté, —elle recule, elle se dresse. Oh ! nos os sont revêtus d'un nouveau corps amoureux.

× × ×

Ô la face cendrée, l'écusson de crin, les bras de cristal ! Le canon sur lequel je dois m'abattre à travers la mêlée des arbres et de l'air léger[28] !

細かい註釈は此処では省くが，上の詩篇は明らかに男性同士の愛欲情景の描与であろう。そして男性同士のこの関係の裡に，ランボーは，待望の「新しい肉体」nouveau corps を見出している。勿論，この「新しい肉

体」は，「見者」たることの試みに於いて，強度の酒精や，時として阿片や大麻の類にも助力を仰ぎ，さらには限度を超えた長大な徒歩旅行などによるところの，濫用の対象としてのその肉体と感覚の改変によって，いくばくかは得られもしよう。しかし，それらは，ランボーを少くとも女性の立場に立たせてはくれぬ。ところがその点，かかる形の関係は，異性愛とは異なって，ランボーを女性の視座とも思えるような異なる感覚の世界の中に立たせてくれる。そして，ここで注意すべきことは，ランボーが「女性の観念の世界は，われわれのそれとは別物でしようか？」と問いかけた時，その言葉のうちには，例えばモンテーニュ Michel de Montaigne などが客観的実在と意識との相関関係を吟味する際，我々人間のその意識に対して何らかの制約を加えずにはいない感覚自体に差し挾んだ疑義，換言すれば，仮りに我々の感覚能力が強化されるか弱化されるかした場合，あるいは何らかの感覚機能が差し引かれるか附加された場合，世界は我々にとって，もっと別なる様態で発現するかも知れぬという疑義，そうした具体的次元に還元された疑義とも希望とも言いうるものが，孕まれているということだろう。したがって，ランボーに於ける同性愛の問題は，世界を異なる形姿に於いて見定めるための，つまりより一層全体的で真なる形姿に於いて見定めるための，「物質主義的」matélialiste[29] な試みの現われとして，「見者」の理論に根本的に関連づけて捉えなおされる必要がある。なぜなら，畢竟，女性は彼の望んでいるような，真理探究の同伴者としての「慈愛の姉妹＝看護修道尼」Soeur de charité ではあり得ぬという，苦い認識の前に立たされることにより，彼は自らの「肉体と魂の裡に」dans une âme et un corps, ヴエルレーヌとの愛欲の関係をとおして，女性的なものの綜合を夢見ていたに相違ないからだ。それはまさに，両性的な世界そのものでもある「人 (On)」との全体的で透明な関係の取り結びのための，徹底した苦行の一環を占めており，「見者」の論理の全体は，「顔にイボを植えつけて，それを大切に育てる」s'implantant et se cultivant des verrues sur le visage[30] というランボーの言葉のとおり，その根底に於いては，一種の肉体改造論だ。「見者」たることの実践の，究極

の達成でもある『イリュミナシオン』に，先に引用した「美なる存在」Being Beauteous の「新しい肉体」と相並んで，次のような，霊肉の乖離の止揚を目指す様々な「肉体」や両性具有（或いは，両性超越）[31] のイマージュが現われるのも，このことと決して無縁ではない。

Hourra pour l'oeuvre inouïe et pour *le corps* merveilleux, pour la première fois ! (Matinée d'ivresse)[32]

Ô maintenant nous si digne de ces tortures ! rassemblons fervement cette promesse surhumaine faite à *notre corps* et *à notre âme crées* : cette promesse, cette demence ! (Matinée d'ivresse)[33]

Je fus, au pied du baldaquin supportant ses bijoux adrés et ses *chefs-d'oeuvre physiques*, un gros ours aux gencives violettes et au poil chenu de chagrin, les yeux aux cristaux et aux argents des consoles. (Bottom)[34]

Homme de constitution ordinaire, *la chair* n'était-elle pas un fruit pendu dans le verger, —ô journées enfantes ! *le corps* un trésor à prodiguer ; ..... (Jeunesse II)[35]

A vendre les *Corps* sans prix, hors de toute race, de tout monde, *de tout sexe*, de toute descendance ! (Solde)[36]

A vendre *les Corps*, les voix, l'immense opulance inquestionable, ce qu'on ne vendra jamais. (Solde)[37]

Son *corps* ! Le dégagement rêvé, le brisement de la grâce croisée de violence nouvelle ! (Génie)[38]

Ton coeur bat dans ce ventre où dort *deux sexe*. (Antique)[39]

以上見て来たように，ランボーに於ける「新しい肉体」の創造は，十九世紀ブルジョア社会の重層的な抑圧の機構のなかで，下層性，地方性に追いやられ，封じ込められた，巨大な無意識の全体の爆発的な復権の運動のひとつの現われであり，パリ・コミューンの蠢動との共同感覚にその渕源を有するところの，身体のジェオグラフィーのもっともラジカルな変革の試みの一発現だ。そして，この「値段のつけられない」sans prix「新しい肉体」は，『地獄の季節』の中で「ペンを持つ手も 鋤を持つ手も 同じことだ。——やり切れぬこの手の世紀！——金輪際，自分の手など持ってはやるまい」La main à plume vaut la main à charru.—Quel siècle à mains !—Je n'aurai jamais ma main[40] とランボーが語ったように，十九世紀ブルジョア社会の労働や収奪の構造からの離脱のための「肉体」であり，彼の夢見た「度はずれのものが規範となる」Enormité devenant norme[41] ような新しい世界に於いて，或いは「手が幅を利かせる世紀」Siécle à mains に対する自由と放浪と大規模な移住 (Son pas! les migrations plus énormes que les anciennes invasions[42]) の「足が幅を利かせる世紀」Siècle à pieds とでも言いうるような世紀に於いて，はじめて正当に評価され，「進歩の乗数」un multiplicateur du progrès[43] ともなるような全人称的「肉体」であろう。そしてこの multiplicateur とは，その媒介的な性質からして，On me pense の me に通底するものと考えられよう。

しかしシャール René Char がいみじくも語ったように，ランボーという詩人は，いまも依然として，われわれの「文明」に対しては皮肉にも，「未だ現われざる文明の最初の詩人[44]」であり続けているのであろうか？

1976・10　（了）

注

(1) OEuvres complètes, édition établie, présentée et annotée par Antoine Adam. Bibliothèque de la pléiade, Gallimard, Paris, 1972, p. 117. (なお，ランボーからの引用原文は，すべて本書に依った。以下，略記号 OE. C.)

(2) OE. C., correspondance, p. 249.

(3) Lettres du voyant (13 et 15 mai 1871), éditées et commentées par Gérald Schaeffer. Librairie Droz, Genève, 1975.

(4) Cf. ibid., pp. 145～149. シェーファーの「註解」を一覧しても解る通り，かつてはもとより当今でも，ランボー研究家マタラッソらの「熱狂的崇拝」だとか，「ランボー神話」の破壊に専念するエチアンブル教授らの「通俗視」などの，過剰な支持と不支持との間に挾まれ，当の「手紙」が，本腰を入れた沈着な解明に，いずれにしても恵まれていなかったのは事実のようだ。

(5) Ibid., p. 127.

(6) Ibid., p. 127.

(7) Cf. Pierre Gascar : Rimbaud et la Commune, Gallimard, 1971, p. 78. —L'inconnu dont parle Rimbaud colle au réel.

(8) Yves Bonnefoy: Rimbaud par lui-meme, édition du Seuil, 1961, p. 55.

(9) J.-P. Richard: Rimbaud ou la poésie du devenir, édition du Seuil, 1955, p. 235.

(10) Cf. Madeleine Perrier: Rimbaud, chemin de la création, Gallimard, 1973. Notons, par exemple, les opinions suivantes de l'auteur:— "une des inventions (de Rimbaud), et non la moindre, sera de confier la garde d'une part de son secret à ces mots les plus courants que nous utilisons tous les jours.", p. 47,—ou "C'est une découverte originale de créer à partir de divers sens d'un même mot.", p. 45.

(11) 後年の Illuminations の Après le déluge に於ける les fleurs qui regardaient déjà などは先に述べた objet pensant の端的な一例であろう。

(12) OE. C., Correspondance, p. 250.

(13) OE. C., p. 96.

(14) Cf. J. P. Houston: The design of Rimbaud's poetry, Yale University Press, 1963, pp. 63～64.

(15) OE. C., Comédie de la soif, 5. Conclusion, p. 75.

(16) Ibid, Correspondance, Rimbaud à Demeny, p. 252.

(17) Yves Bonnefoy: op. cit., p. 46.

(18) Cf. Jacques Gengoux: La pensée poétique de Rimbaud, Librarie Nizet, 1950.

(19) Cf. Claude-Edmonde Magny : Arthur Rimbaud, Poètes d'aujourd'hui, seghers, 1949, p. 18.

(20) OE. C., Corresondance, lettre à Izambard, 13 mai 1871, p. 249.

(21) Ibid., Vies II, p. 128.

(22) Ibid., Phrases, p. 131.

(23) Ibid., Une Saison en Enfer, Délires I, p. 103.

(24) Charles Chadwick: Etudes sur Rimbaud, Nizet, 1960, p. 51.

(25) Ibid., pp. 50～51.

(26) Pierre Gascar: Op. cit., p. 91.

(27) OE. C., Une Saison en Enfer, Nuit de l'enfer, p. 101.

(28) Ibid., Illuminations, Being Beauteous, p. 127.

(29) Ibid., Correspondance, lettre à Demeny, 15 mai 1821, p. 252.

(30) Ibid., p. 251.

(31) J.-P. Richard は, Illuminations に登場する踊り子 danseuse に就いて注目すべき解釈を施している, —elle cesse même d'être femme: surhumaine, désexuée..., op. cit., p. 195.

(32) OE. C., Illuminations, p. 130.

(33) Ibid., p. 131.

(34) Ibid., p. 151.

(35) Ibid., p. 147.

(36) Ibid., p. 145.

(37) Ibid., p. 146.

(38) Ibid., p. 155.

◇ 註 (11) への補註—更には Rimbaud の言う「客観的ポエジー」poésie objective とても, かかる「objet が objet を思う」という関係性のもとに了解されてよい。 ◇

(39) Ibid., p. 127. この詩篇の中の「牧神の優雅な息子」Gracieux fils de Pan の「牧神」は, C. A. Hackett も指摘しているように (Rimbaud l'enfant, José Corti, 1948, p. 140), 全能者でもあれば獣でもあり, 男でもあれば女でもある至高の存在だ。そしてこの「息子」もそれに似た存在であるのは確かのようだ。また, ランボーに於ける fils は,「洪水の息子」fils des déluges (Fêttes de la Faim),「太陽の息子」fils du soleil (Vagabond) などと並んで, 至大なるものの類同的「破片」もしくは「小宇宙」であることをも意味していよう。なお, T. S. Eliot の The Waste Land に於いて, 両性具有者テイレジアスが, その詩篇に描き出された廃墟としての近代社会を見はるかす全的認識者として重要な位置に立たされているのは示唆的であろう。

(40) Ibid., Une Saison en Enfer, Mauvais sang, p. 94. なお労働の拒否に関する言辞は, 此処で敢えて列挙する要もないほどに, Rimbaud に於いては頻繁であるため, 割愛する。詩人が十才の頃にノートに書き入れた「金利生活者」宣言も, 同様に解しうる。また, この「手」の問題に就いては, Jaques Plessen: Promenade et Poésie, Mouton & Cie, 1967, p. 48 を参照されたい。—"Pied païen contre main chrétienne...etc. 要するにこの章句は, いわば「手のヘゲモニー」に対する「足」の側からの反抗である。

(41) Ibid., Correspondance, Rimbaud à Demeny, 15 mai 1871, p. 252.

(42) Ibid., Illuminations, Génie, p. 155.

(43) Ibid., Correspondance, p. 252.

(44) René Char: Recherche de la Base et du Sommet, Gallimard, 1965, p. 102.